

はちまんやま  
八幡山の岩くらべ  
(かんおんじちよう  
観音寺町)

かんおんじし はちまんやま かがみ  
観音寺市の八幡山は、鏡のような瀬戸の海と緑の松林の続く白い砂浜を見わたすながめのよい山です。この山の上には八幡  
さまのお宮があります、山を登っていく途中に人間の高さの二倍ほどもある大きな岩が二つならんでいます。

どちらもおなじような大ききで、色も形もよくにっています、その一つは立っていて、もう一つは横だおしになっているのです。  
どうしておなじような大ききで、色も形もよくにっている二つの岩が、一つは立っており、一つは横だおしになっているのですよ  
うか。

むかしむかし、ずーっとむかしのこと、この山がまだだれのものでもなかった頃の話です。

この山の上からながめるとたいへん景色がよいということをかきさされた東の国の神さま、八幡さまが、ここに自分の住むお宮を  
造ろうと思いたち、はるばる海を渡ってまいりました。

あかひにて しろすなはま うえ みどり まつ  
赤い日に照らされて、白い砂浜の上に、緑の松につつまれた美しい山のすがたをはるか海の上からごらんになった八幡様は、  
なが ふなたび くろう ふね  
長い船旅の苦勞もわすれ、船をこぐ手をとめて、

「ああ、やっとやってきた。話に聞いたとおり、なんとというきれいな景色だろう。」

と、しばらくはうっとりとしていらっしやいましたが、ふと西の方を見わたしますと、一そこの船がこちらへ向かってこぎよせているではありませんか。

「おーい、その船に乗っているのは誰だーい。」

八幡さまは、大きな声で聞きました。

「はーい。私は西の国の仏さま、観音ぼさつですよー。あなたは誰ですかあ。」

「私は東の国の神さま、八幡大明神ですよー。あなたは何しにいらっしやったのですかー。」

「あの山の上に、私の住むお堂を造ろうと思っやってきたのですよー。」

八幡さまと観音さまは、おたがいに相手におくれたら山を取られてしまおうと考えました。ですから、もう一生けんめいに、

「よいしよ、よいしよ。」

「よいしよ、よいしよ。」

と船をこぎました。夕やけが海をそめて、赤い波がキラキラキラ光る上を、二そこの船は山のふもとの砂浜をめざして進んでいきます。

「よいしよ、よいしよ。」

「よいしょ、よいしょ。」

八幡さまも観音さまもむちゆうです。

「よいしょ、よいしょ。」

「よいしょ、よいしょ。」

決勝点はもう目の前です。

「よいしょ、よいしょ。」

「よいしょ、よいしょ。」

さあ、どちらの船が先に着いたでしょうか。八幡船でしょうか。それとも観音船でしょうか。

先に着いたのは、八幡船ではありません。観音船でもありません。二そこの船は同時に着いたのです。

八幡さまが船からとびおりたのは、観音さまが船からとびおりたのと一緒でした。

八幡さまは言いました。

「この山の上にお宮を建てて住むつもりです。この山は私のものです。」

観音さまも言いました。

「この山の上に、私はお堂を建てて住むつもりです。この山は私のものです。」

「それはこまります。私が先にこの山を見つけにきたのです。」

「いえ、私こそ先です。」

「ちがいます。」

「ちがいません。」

「ちがいますつたら。」

「ちがいませんつたら。」

いくたびに言い合ってもきりがありません。八幡さまも観音さまもすっかりくたびれてしまいました。

八幡さまはそこにあった大きな岩の上にとっかかり腰をおろしてしまいました。

観音さまもその岩のそばにある大きな岩の上にとっかかり腰をおろしてしまいました。

八幡さまがふと観音さまの腰をおろした岩を見ますと、どうでしょう。その岩は自分の腰をおろした岩と、大きさも形も色も、たいそうよくにているではありませんか。

「おやおや、これは面白い。私の腰をおろしているこの岩と、あなたの腰をおろしているその岩は、まるで、ふたごのように

にている。」

「なるほど、ほんとうによくにている。」

「いや、いいことを考えた。あなたがその岩を持ち、私がこの岩を持って、山の急な所で立てくらべをしよう。そして、早くたおれた方を負けとして勝負をきめようではないか。」

「それは名案だ。よし、さっそくやってみよう。」

そこで二人は自分の腰をおろしていた岩を、どっこいしょ、と肩にかつぐと山のけわしい道を、よいしょ、よいしょ、と登って行きました。

「ここはどうかね。下はすべすべした岩だし、場所も広くあいている。」

「なるほど。ここに岩を立てるのはなかなかむずかしそうだ。よし、ここで立てくらべをしよう。」

「いいかね。一、二の三で手をはなすことにしよう。」

八幡さまと観音さまは、それぞれ自分の岩を立てて身がまえました。

「はいっ、一、二の三。」

ふたりは同時にさっと手をはなしました。

ふたつの岩はしばらく向かい合って、まっすぐ立っていましたが、やがて一方の岩がぐらっとゆれ、どすーんと大きな地ひびきを立てて倒れてしまったのです。

さあ、皆さんはどちらの岩が倒れたと思いますか。

八幡さまの岩くらの話はこれでおしまい。

(採話 高松児童文学研究会)

(「さぬき民話集」より)